

*B l o w e r s*

vol. 5

1991.12.12.R.

# めにう ~MENU~

3~6	Mental Ranger	文・長船吉光 絵・ただのりな
7~18	Damyan=Kizaki's Road of The Messiah.	Damyan=Kizaki
19~25	真鶴学園風雲録 全体リプレイ	
	真鶴レポート	岬当麻
26	元GG常連による同人誌のお知らせ	ただのりな
27	コミケレポート!	岬当麻
28・29	仮設読者コーナー	
30・31	一等喫煙室	空技廠横浜評議会

※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み200円）が必要です。今回は2/22までにアクションを送って下さい。

※定期試験につき、EX.SYST.EM関連の記事は今回すべてお休みです。

※編集作業の混乱のため、今回「Damyan=Kizaki's Road of The Messiah.」（うー長い）は2話分掲載されています。あしからず御諒承下さい。

※特口魂は「一等喫煙室」に改題しました。特に意味はありません。

## 「Echoで悪いか！」 by 本居こじ

永平寺がお山へ行きました。折角入った大学（駒大・仏・仏）おっ放り出して……。しかも、徒歩で。「修業」と奴は言うけれど、あそこまで行くと一般の視点から見れば「奇行」としか映らないと思う。彼が言うには、その白い視線に耐えることがまた修業になるらしいんだけど……。ね。コースとしては、国道一号をずっと西へ行って、御殿場越えして富士山拜んで、名古屋から関ヶ原へ折れ、伊吹山を見ながら北陸線沿いに北上。福井市街から九頭竜川沿いに登っていくコースだとは思いますが、何せ奇行の人だから。ヘタすると寒さと雪を乗り越えて、美濃から油坂峠越えをやらかして九頭龍湖から下るかもしれません。あの辺で遭難者が出たら、間違いなく奴です。

さてさて皆様、大変ご迷惑をおかけいたしました。体も旧に戻ってきたようなので、とりあえず復帰します。岬「代行」会長の天下もこれでとりあえずおしまい。彼もいろいろ言いたいことを言ってきたようですが、……。尻拭いが回ってくんのかな。

そうそう、冬コミ行ってきましたよ！晴海の。最大の目的は「エテルナ電腦工房」。何と言ってもこの本を作ろうという衝動を与えたところだし。（個人的な逆恨みもあるしね。蔵田さんならわかると思う）まあ、それはレポート（書いたのは岬）を見て下さい。

# *Mental Ranger*

文・長船吉光  
挿絵・ただのりな



序：その時、ミラマーは空間を漂っていた。上も下もない卵白色一色の世界で、時折ぼんやり赤や緑の光が現われては消えていた。

「ここは……？」

彼女はあたりを見回したが、まったく何も見られない。漠然としただるさが、全身を覆っていた。

「……？」

思い返してみると、記憶があるのは床についたところまでである。特別に薬物を使用した覚えもない。

「キサラ！」

彼女は試しに呼んでみた。が、声は周囲に吸収されてしまったかのように、虚しく消えてしまった。

そこへ、突如けたたましい笑い声がおおいかぶさってきた。声の主の方に振り返った瞬間、彼女はぞわりとしたものを感じた。

——そこには、巨大なトビリシの姿があったのだ。

「よくもこの私を侮辱してくれたな！」誰が見ても明らかに、トビリシは狂っていた。「いずれ貴様の首は討ち取ってくれる！」

「何を！」

彼女は身構え、寝巻の懐に手を突っ込んで、そして硬直した。

「……なっ！」

御幣が消えていた。寝るときも小型のものを、肌身離さず携行しているというのに……！

トビリシはひとしきりミラマーに嘲笑を浴びせかけると、やがて霧の中へ溶け込んでいった。あとには甲高い笑い声だけが、残響として残っていた。狂った笑い声はあらゆる方向から襲いかかり、あ

ろうことか増幅までされ、ミラマーの五感全てを押し潰した。

彼女はたまらず印を結び、重い着いた呪文を片端から絶叫した。……あたりが急に、まっ暗になった。そして、上下の感覚が戻った。

ミラマーはガバと跳ね起きた。息が荒く、汗が全身にじっとりと噴き出している。彼女は布団の上から膝を抱えこみ、右手の親指の爪をかんだ。

彼女はそれから朝まで、眠ることができなかった。

1：翌朝、ミラマーを起こしに彼女の部屋へやって来たキサラは、はっと息を呑み込んだ。ミラマーが目の周りにくまをこしらえ、ふとんの上で膝を抱えこんで爪をかみながら、何事か呟いていたのである。

「転移したのか……それとも……」

キサラはその姿に不気味な影を感じ、障子を戻した。ミラマーはまったく気付いていなかった。

昼過ぎになって、ミラマーはようやく自室から出てきた。表の店にいたキサラは、彼女が売り物のしょう油煎餅に手をつけているのをたしなめる気にもなれず、黙って見ていた。やがてミラマーは、来た時同様にふらりと奥に戻っていった。

奥の禅堂は細長いところで、畳が細長く一列に並べられている。そしてその列は地面より少し高め

で、彼女の檀家たちがそこで坐禅を組めるようになっていた。彼女は毎週土曜日の早朝に、坐禅会を開いている。

禅を組むときには壁に向かって坐る。そしてミラマーは時折姿勢の崩れているものを直してやり、居眠りするものには肩に警策を入れるのである。もっとも、警策は「本職」よりもはるかに力を抜いていた。音だけは派手だった。

今、禅堂では彼女が一人だけで禅を組んでいた。背後の庭園——一端正な、緑の多い庭である——の池で、時折鯉が跳ねた。この地方特有の和らかな日差しの下で、秋の涼しいそよ風が彼女自慢の松の木の木葉を揺らし、低く刈り揃えられた生け垣を抜けた。



……あれはただの夢だったのか？

ミラマーは自問した。

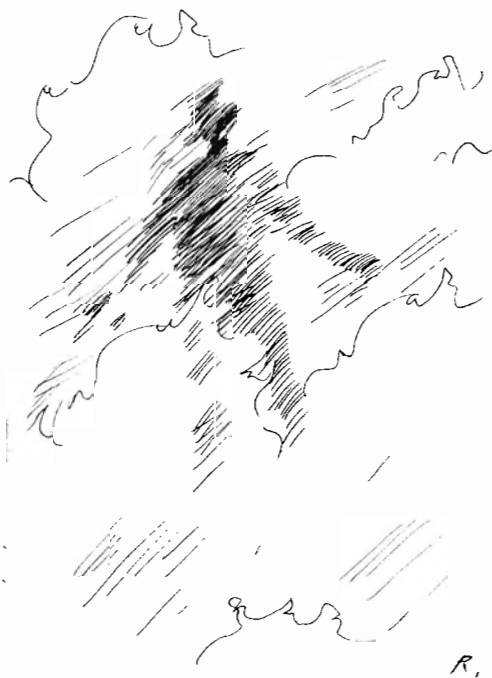
否、それではあれだけの強烈な存在感は説明し切れない。

それでは、あれは一体何を意味するのか？

そもそもトビリシの最後は、己が目でしかと見届けたはずではなかったか。キサラが竜となっていたプレスをもとにも食らい、一瞬にして黒焦げになったのではなかったか。そして、それをその場で土に帰したのは他ならぬ自分ではなかったか。

……一瞬？

そこでミラマーは、ハタと思いが当たった。今ここでくすんだ檜の壁を見つめて静かに考えてみれば、どうにも不自然ではないか。一体、いかに竜のプレスとはいえ、生身の身体がああも簡単に炭化してし



もうものだろうか……？

普通火葬する時でさえ、一時間は燃やさなければ骨にならない。骨を通りこして炭化するまでにはさらに時間を要する。やはり変ではないか。そうとも、変だ。だとすれば、なぜ……。

そして再び古びた檜の壁の隅を見詰めて深い思索の海に沐しているうちに、やがて一つの結論が煮詰まった。

己が姿を変えたのだ。炭化物に  
ポリキマー・セルフ  
酷似したものに……。

一体トビリシは、どこまで時をずらせたのか。それを思うとミラマーは、気が滅入ってきて仕方がなかった。だが、それを確実に調べる術はない。

彼女は合掌低頭すると、坐を解いた。そのまま勢いつけてくるりと庭に向いた。既に日が沈み始めているのか、あたりは朱に染まっていた。

庭へわらの草履をつっかけて下りてみた。……と、不意に右の緒が切れた。大分古くなって傷んでいたのも無理からぬこととも思われたが、不吉な予感が走った。彼女はかがみ込んで、緒の切れたサンダルを取り上げた。

「……………」

仕方なさに、軽く溜息をつい

た。明日にでも靴屋のホルヒの所へ行って直してもらうか、新しいのを買わねばならない。彼の家は異教徒だが……仕方があるまい。この界限で靴屋はそこだけなのだから。

片方だけはいているのも妙に思われて、彼女は両方とも素足になった。少し湿り気を含んだ土が、快感と安らぎを与えた。

2：その晩のこと、彼女は再び空白の中を漂っていた。昨晚の記憶がありありと甦る。不安にかられてミラマーは懐を探った。……御幣は確かにある。

少し余裕ができて、彼女は泳ぐように体を動かしてみた。……動いた。自由自在に動き回ることができる。キサラが時折使う飛行の術は、こんな感じなのだろうか……いや、そんなことはあるまい。キサラは飛んでいるとき、今自分がやっているほどじたばた手足を動かさずはしない。いつだったか、意志さえ持てば自由にそちらへ飛んで行けるのだ、という話を修業中に導師から聞いたことがあったが……。

彼女は妙な悪寒にとらわれ、御幣を取り出した。戦士が刀の血糊を払うようにそれを縦に振って気を整えると、彼女は予測される事態に備えた。

(続)



# Damyan = Kizaki's Road of The Messiah

Road No 2 "The troublesome visitors"

Written by Damyan = Kizaki

## PROLOGUE

俺達を乗せた馬車は、一路マディ＝ラングの待つ帝国貿易会館へと、暗い石畳の道を軽快に走っていた。そこへ行けば、ここ、大英帝国租借地“Xeus”の全貌が明らかになるに違いない。マディ本人からの口によって。まあ、3日間何も食っていない、やたら不平をブーたれる胃袋をなだめる目的もあるが……それにしても、ここは過去の世界なんだろうか。多少歴史のズレがあるとは言え、日本もイギリスも、こうして英領オーストラリアもある、一見世界史で教わったこととほとんど同じなのだ。しかし、“Xeus”は史実にはまったくできていないし、それよりもまだないはずのアンドロイド、あの転送機……事実と空想の同居するこの世界、もうすぐ真実が分かる……俺は胸の高まりを押さえることができなかった。同乗している仲間たちも心なしか口数が少ない。にしても、仮にも俺達はパーティに行く身、こんな暗すぎる連中でいいんだろうか？俺は気分転換にと、馬車の窓を大きく開け放った。気持ちいい風と一緒に、蒸気機関の出すススが馬車の中に飛び込んでくる。案の定みんなせき込み始め、女は化粧がススでだいなしになったのをブーたれ始め、一斉に馬車の中は騒がしくなった。そうでなくつちやな、俺はススがこびりついて文字通り真っ黒になってしまったグラサンをふいた。

一際でかい屋敷が見えてきた。あちらこちらから来た馬車やら一昔前の自動車（これも蒸気機関で動いているそうだ。ガーニーというらしい）の大群がそっちに向かっている。俺はもう一度グラサンをふき、横に置いといた聖剣“ダークブレイカー”（何度も言うがこいつは木刀だ）を肩にかつぎ直した。

## I

俺達は中庭に案内された。石畳の小道を召使いらしいジジイに連れられて行くと、でかい建物の向こう側にさらにでかいガラス張りらしい塔だかドームだか知らねえが、ここには明らかに不向きの建物が見えた。何だありや……ま、後でマディの奴に聞くとするか。前方のざわめきに目を戻すと、一行はすでに中庭の入り口に立っていた。

昔なつかしいガスライトやライムライトに照らされた広い中庭には、すでに多くの人々がドレスやらタキシヤラを着、手にワインの入ったグラスを持っていろいろと話に華を咲かせていた。いくつか並べられた長テーブルにはまだ何も置かれていない。まだ開会には早いようだ。俺はメイドからワインのグラスを受取り、奥に進んだ。中庭の隅の方にはピアノやオルガン、それにこっちでも有名な日本のからくり人形が何体か置かれ、流れる軽快な音楽に合わせてパフォーマンスを演じていた。その辺にいる連中はみんな人形の方を興味深く見ているが、俺は誰もいないのにひとりで音楽を奏でているピアノやオルガンとかの方に気をひかれた。何々だ……？そういえばこっちのものに比べ、あれらはいく分でかいように思える。それに何だ、あのエントツは？隣にいたイブニングのレディに聞いてみると、あれは蒸気機関の自動音楽演奏機だそうだ。見ると、定期的にエントツが蒸気やススを吹いている。さらに、俺はその親切なレディの話によって、この世界は蒸気機関によってそのほとんどが成り立っていることを知った。全くあの蒸気飛行機といい、蒸気ガーニー、このピアノ達といい、やはりこっちの歴史とは明らかな違いがあるようだ。蒸気コンピューターもあるそうだから驚きだ、全く。それにしても寒い……砂漠の夜ほどではないが、一応はここも砂漠の中なのだ。ただでさえうすいこのタキシの生地、直す時に生地をうすいものに変えたらしくペラッペラになっちゃったマントじゃあ、全く鳥ハダ

立ちまう……、と中庭に戻ると、何とみんなコートやらジャケットやらあつたかい装備になつてるじゃねえか。俺が奥に行つてた間に中で貸してもらつたそうだ。しかも、もう一着も残つてねえだと……ええい畜生！どうして最近の俺はこうも運が悪いんだあ!?俺がブーたれてると、周りの視線が斜め前方に集中し、ざわめきが消えた。やれやれ、やっとボス猿のおでましつてわけか。俺はホテルからかつぱらつてきたハバナ葉巻に、これまたかつぱらつてきた黄燐マッチで火をつけた。

マディ＝ラングはノーフォークジャケットにワインのグラス、何故か知らんがロウソクが3本のつかつた燭台を持って屋敷の2階ベランダに現れた。横にはドレスを着たナーシム追難（またアンドロイドじゃねーだろーなー）、そして軍服を着た日本人。あの初老の日本人が白瀬大尉だろうか。

「みなさん、今夜はよくおいで下さいました。私がマディ＝ラングです。以後お見しりおきを」

ブラウンのヒゲをたくわえたその中年男が口を開いた。後からナーシムが彼のイギリス英語を日本語に訳して言う。

「まず、あなた方を巻き込んでしまったことを深くおわびさせて下さい。成り行きとは言え、本当に申し訳ない……とにかく、この世界についてご説明しよう。ここはあなた方の世界とは似ているものの、若干の相違点がある。まず、蒸気機関の発達が目覚ましいことです。すでに蒸気航空機や蒸気ガーニー、自動ピアノなどご覧になったかと思われませんが、ここは蒸気の力によって支えられていると言っても過言ではありません。次に、時代が違うこと。ここは1991年9月ではなく、1889年の2月……すなわち、前者と合わせてあなた方の常識はほとんど通用しないということになります。どうか頭に入れておいてもらいたい」

とたんに周りがざわめきだした。まあ、当たり前だ。いきなりそんなこと言われたって、すぐに信じろと言う方がおかしい。現に、あのホテルの支配人のセリフだって、真に受けてたのはほとんどいなかった。みんな、アトラクションが何かだと思つてたのだ。ま、ガーニーや自動ピアノに蒸気コンピューターの話で、まんざら信じられなくてもなくなつてきたようだがな。だんだんと料理が運ばれ、たまらずそれらをついばむ野郎が出てきた中、（俺だって食いてえ）再びマディが口を開く。

「そして……これは誠に申し上げにくいのですが……この、我々の世界は、異」

「キャアアアッ!!」

おずおずとしたマディのセリフが、つまらなそうに話を聞いてた“この世界”の客人の黄色い悲鳴にかき消された。とっさに聖剣を抜き放ち、悲鳴のした方へ走る。見ると、さっきまで動いてた自動演奏機群の上に銃～見たところ19世紀に出回つてた連発銃（ペバボックス）のようだ～を持った女が落っこつてるじゃねえか。動かないところを見ると気絶か、即死か……体のあちこちから煙が立ち昇り、放電している……つて、人間じゃねえ！アンドロイドか……？一体何があつたつてんだ!?見るとマディとナーシム、それに見たことのない背の高い（と言っても206cmの俺ほどじゃねえがな）長髪の美青年（あんま口にはしたかねえが、周りの反応からそう言うしかない）がこっちに向け寄つてくる。その青年は一目見ると、

「チッ、また偵察ロイドか……空中で失速したな、よし、マディ、あと3匹を追うぞ！戦闘用蒸気自動車を用意するッ！

と言ひ捨て、外に向かつて走ると思いきや、「プロジェクトイーグル」のジャッキー＝チェンの如くヒラリと扉を駆け上がつて闇に消えた。それをナーシムが追うが、奥から現れたニセナーシムに俺達と違う客人達はかなり面食らつたようだ。マディも追おうとするが、ふみとどまつて俺達に叫んだ。

「我々の世界は、外の星から来たと思われる異星人たちに占領、支配されていますッ！それは奴らの偵察用アンドロイド、4体一組で現れ、我々の行動をチェックした後、破壊工作をしていく面倒な連中ですッ！我々は抵抗のため、こうして敵のアンドロイドを狩つていのですッ！もし義に感ずるところあれば、是非とも貴殿方の力をお借りしたいッ！無



理には言いませんが、どうか我々を助けて下さいませんかッ!!」

通訳もいないのにまくしたてたマディは笑顔で親指を立ててみせた。言葉は分からなくても、助けを求めていることが感じられた連中、つまり俺達全員が、一步前に歩み出たからだ。さあて、いよいよおもしろくなってきたな…いっちょもんだるかっ、救世主誕生の第一歩によ。俺は聖剣をまっ暗な空に向かって高く掲げた。

## II

俺はキャタピラのついた装甲車のようなガーニーに乗っていったマディ、ナーシム、エリス＝オレスン～塀を飛び越えていった野郎の名だ～、それに腕に覚えのある連中数人を見送った。俺も聖剣片手に同行しようかと思ったが、やめといた。そんなただ敵の先兵を殺すだけの抵抗よりも、いい方法が思いついたからだ。時間はかかるけどな、実行、すなわち“逆襲（アタック）”までは。俺は闇の中に消えたガーニーに一瞥をくると、使用を許された商館の書齋にこもるため、中に戻った。

さすがに建物がこんだけかいと、普通は小じんまりとした印象のある書齋もイメージが思い切り崩れる。少なくとも俺の部屋（俺の住んでるマンションは1部屋30畳ある）の倍はありそうな広々としたホールの中に本が正に死ぬほど置いてあるのだ！さすがに俺もこれには面食らったが、メイドを数人借りて何とか望みの本を手にすることができた。まず“Xeus”の歴史書。特に近代の解説に重点を置いているものを選んだ。次に、初心者用の“機械術”の解説書。“機械術”とは、あつちで言うコンピューター管理・製造・プログラミング技術全般のこと、早く言えば蒸気コンピューターの取扱技術のことだ。特に“クラッキング”（プログラミングのこと）の初歩解説書～簡単な指令にデータ管理、図形製作～を数冊引っぱり出してきた。何かムチャクチャ読み古されてて使いづらいが…そんなもって、エイリアンに対する全ての報告書～これが最も大切だ～。号外やら情報通の手紙とかもすべて網羅した。そして、医学・生物学書。中でも細菌・ウイルス方面の専門書ばかりを集めさせた。

これらの普段読みそうにもない本を、なぜ今さら勉強するのか？俺の考えはこうだ。異星人どもは遠い外宇宙から、宇宙船～“Xeus”の連中は“銀の船”と呼んでいた～に乗って長い旅をしてきたわけだ。気の遠くなるような長い旅でも安全をはかるため、多分宇宙船は無菌状態だと俺は推理した。ならば、ここにたどり着いた何十世代後の異星人は免疫なんざとつくになくなってるとに違いない。そこを突くのが俺の狙いだ。つまり、奴らのデータを差分機関（ディファレンスエンジン）～一般的な蒸気コンピューターのことだ～にかけて分析し、何種類かのウイルスのシミュレートをくり返した後に、最終的には奴等の致命的弱点を探り出す。それと同時に奴らの弱点を積んだ爆弾を敵陣地に落とす戦闘爆撃機～一撃離脱から空中戦までそつなくこなし、多量の兵器と大型の機関を積むことのできる小～中型の奴だ～の設計を同じく差分機関に行なわせ、製作する。そして一般市民を避難させた後に爆撃を行ない、敵が弱ったところを“Xeus”と俺達の連合軍で一気にたたみかけ、ここからたたき出す。成功すれば、必ずやこの世界の人々を立ち上がらせるきっかけになるし、救世主への道もまた一步目標へ近付くというもの。

2週間後、ほぼ全ての資料に目を通し、ある程度機関も扱えるようになった俺は、その時、異星人のことなんざそつちのけで、今後の運動不足で筋力が落ちるんじゃないかと心配していた。勝気になっていた。やれると思っていた、心の深底から。

## III

全く、現実ほど厳しいものはない。今まで俺のやる事成す事に一度も口を出さなかったことのなかった野郎が、まともや俺に牙をむいた。

異星人のデータ検索は難行していた。せめて、解剖報告でもありやあな一。ここにある資料は、そのほとんどが見かけや敵アンドロイド～パーティの時マディ達が砂漠で処分してきたのは女性型の監視・偵察用アンドロイドで、今開発中の蒸気スーパーコンピューター、“解析機関”のスイッチキー№2とやらを盗もうとしたところ、ナーシムのジャミン

グによって思考回路が混乱し、動かなくなったところをマディがあっちで仕入れてきたステンMkⅡ7挺分の鉛弾をモロに受け、エリスのカンフーらしい電光石火の攻撃によってやり足りないぐらいあっさりケリがついたそう～の特徴（これは多少役に立つかな）、ひでえものには3流新聞に乗った異星人に対する変な設定の数々と、弱点割り出しには難しいものばかりなのだ。差分機関の計算の遅さ（当たり前だ、蒸気機関なんだから）にボイラー圧の不安定と重なって、結果が出るのは少なくとも来月あたりらしい。ったく、こいつあ誤算だったな……だから、戦闘機的设计～F666スチーム＝デヴィルと命名した。でもここの連中に言わせると、“蒸気機関高速戦闘爆撃用航空機”だそーだ～もゼーんぜん進んでない。しかし、俺はその間、恐るべき事実を2つも発見してしまった。1つは、連中の持つ兵器の力を見せつけられたことだ。異星人襲来のレポートを見ていると、奴らに抵抗しようとした西太后が“遊星爆弾”なる超兵器で北京ごと吹っ飛ばされてしまったという記事を俺は見つけた。今では北京はただ、でかい湖～北京の跡～が残っているだけだというのを聞き、俺は奴らの力のすさまじさに恐怖した。俺は、“Xeus”の連中は、こんな奴らを敵に回していたのか！そして、そんな奴らのいる所が、ここ、イギリス商館のすぐ裏、俺達がパーティに行ったとき見かけた、あのガラス張りの建物～クリスタルタワー～だというのをエリスに聞いたことだ。奴らはその気になれば、すぐにでも“Xeus”を砂漠のちりに変えることができる……！俺は、一般市民の避難経路と避難場所の確保を急ぐことにした。

そういえば、最近書斎や機関室に出入りする連中が増えてきた。聞いてみると、“少しでも“Xeus”の人達を助けたいから俺達も何かいい方法を考えに来た”そーだ。目的が漠然としてて、あまり役に立ちそうにないがそういう思いが多ければ多いほど、俺達の団結心は大きくなる。“団結”それはこんな状況では水爆なんぞより強力な兵器、助っ人だ。しかし、そんな連中の必死の思いが、異星人どものさらなる恐ろしさを誇張することになるろうとは、こん時は思いもしなかった。

その日は、砂漠にいた時俺にナーシムの話をしてくれた西風と、SEだと言う久遠寺という男が機関室に入りびたっていて、異星人の母船のヴィジョンを何とかとらえようと必死になっていた。彼らは1週間ほどここに入り出していらしく、ヒゲは伸び放題、目は血走って精神異常者みたくなっていた彼らは、かわいそうに、他の連中からひたすら避けられてたようだ。そんな奴らが歓声を上げたのは、俺がデータ解析の進み具合を見に機関室に入った時だった。

「やりましたよ鬼崎さん、とうとうめつけました！北の爪星団の方向に、“銀の船”らしき物体をとらえました！今、蒸気映像に切りかえるんで、鬼崎さんも見てって下さいよ」

心の底からうれしそうにしゃべる西風を見てると、俺はどこからともなく安心感が沸き出て来るのを感じた。久遠寺がパンチカードを本体の横にある竹ヒゴをいくつかヒモでくっつけたおもちゃみたいな機械のスリットに差し込むと、竹ヒゴがカチャカチャと動き出し、見にくいものの何かの絵になった。それは、月食のような、月の欠けた映像だった。

「おいおい、月なんぞ映してどーすんだ」

俺は笑いながら言ってやったが、西風の顔面が蒼白なのを見ると、多分これがとんでもないものなんだろうと推測してみた……そして、その不安は見事に的中した。

「ぜ、全長……こ、これは正確には、ちょっと分かりませんが、……す、数万キロか、と……」

俺は愕然とした。そんなでかい宇宙船なら、少なくとも1小国家がゆうに生活できるじゃねえか。それだけじゃない。それだけでかいつつーことは、あの北京を一瞬にして焦土と化した“遊星爆弾”を始めとする超兵器を正にいくらでも積めるはずだ！奴らをもしらせてしまえば、地球など一瞬にして消え去ってしまうにちがいない。……

この時点で、俺達の勝つ確率は、限りなく0パーセントに近づいた。

## EPILOGUE

その日の連中の顔は、いつになく喜びに満ちていた。波津野に帰れる時が来たのだ。

マディの話によると、転送機のボイラー圧が不安定で転送が危険だったそうだが、ようやく準備が整ったらしい。帰ることにした連中は、“Xeus”のはずれにある日本人街や“サウス＝ロンドン”でおみやげを買いあさっていた。マディから全員に土産代として150ドルが渡されていたので、不便はしなかったようだ。何を買っていったか……まあ、言い始めるとキリがないのでやめとこう。一応、商館地下の転送機の前に連れて来られた時、正にマンガの如くかかえ切れない品物をおつぎ、むかえに来たペンタス救助6課の連中もほとほとあきれ果てていた。と言っておこうか。（やっぱここは異世界だったか）

そして、いよいよ転送、という時に俺はマディに言った。

「俺は残る。ダメとは言わせねえ。確かに俺は客人、異世界の人間だ。てめえらの“手出し無用”なんて言うことも分かる。しかしなあ、世界の一つ一つはみんなつながってるんじゃないのか、“仲間”じゃないのか！他の連中はどうあれ、俺は今危機に瀕している“仲間”を少しでも助ける。助けるのが俺の義務だ。ホテルに行ってるからな、ムリヤリ帰らせようなんてことしたら、ぶつとばすぞオラッ！」

やれやれ、本当にこれで良かったのか？勝ち目はねえんだぞ、死ぬのは目に見えてるんだぞ！いいんだ、俺の決めたことさ……死のうが骨をうずめようが、俺の勝手さ……俺は自問自答しながらホテルの石畳の道を歩いていた。追っては来ないようだ。やれやれ……。

“運命”か……こうして“Xeus”に流れ着いたのも運命、異星人と戦うことになったのも運命、もし死んでも、それは“運命”……“運命は、未来は作りかえるものだ”なんてマンガとか小説とかじゃ言ってるが、俺達はそんなに強くない。いくらイキがってみても、結果がでりゃそれが未来、運命だ。所詮、俺達は運命をあやつるなんてことはできねえ、“見えざる手”にあやつられる、ただのあやつり人形なのかな……

……悲しいな、まったく。……

TO BE CONTINUED

Special Thanks to—————

貧乏ヒマなしの俺を“World of Steam”に連れてってくれた—Miss Ayako=Tano  
美しき彼女に幸いあれ—————

鬼崎蛇弥闇 設定（その1）

職業：神父 趣味：刀剣術×2・ギャンブル

性格：忙しくない／善人／クール／呑める／一匹狼／思慮深い／コツコツ／のめりこむ／知性派／変／シリアス／都会的

状態：体力値144 知力値139 気力値121

アイテム：“Xeus”の壁のかけら

ステンレン・パンチカード

“Xeus”特別割引券

称号：説明会（11月現在）

1966年6月6日生 25歳

ワープロ代行：岬より（その1）

とりあえず半分！どういうわけか、この5号を送る前に6号の分（多分）が来てしまったので、これからまた打ち込みです。一応「那由多～」やってない人のために付け加えると、「ペンタス」というのは、次空の歪みに巻き込まれた人を助けるための組織だそうです。直接お世話になったことがないのでよくは知りませんがね。

にしてもこの人の原稿は、一文が長い割には読点が少なくて読み辛い（＝打ち辛い）！しかも、そのテのに多い傾向、「主述の混乱」に見事にハマってるし。表現も所々変なところがあるしね。

さあーて、長丁場もう一発いくか！ファイト、いッぱアーツっ！

# Damyan = Kizaki's Road of The Messiah

Road No 3 "a betrayer"

Written by Damyan = Kizaki

## Prologue

…今、ナーシム＝追難のことを考えていた。ほんの少し前まで、あのアンドロイドの砂漠での嫌な記憶を本物の方に転嫁させて、ざけんじゃねーぞこのクソアマなどとブーたれてた女。その後のなれなれしい態度、わざとらしい笑顔、いつも何か隠しているような仕草、全てが気に食わなかった女。——彼女もまた、“運命”という名の永久機関に翻弄され続けた人間の1人だったのだ。いつの時代、どこの世界にも、とてつもなく巨大なイタズラ小僧にもて遊ばれた奴はいるもんだ。全く…

消えかかったスタンドのロウソクの小さな炎を見つめながら、俺は数時間前のイギリス商館2階のベランダでの出来事を、1つ1つ思い返していた。

…ナーシムは泣いていた。何もかも飲み込んでしまいそうな、暗い暗い夜空を見上げながら。それをなだめるんのように、脇に立つ男が1人。そいつ——日崎は俺に向かって首を横に振り～一人にしておけ～、元のアンドロイド撃退記念パーティの中へ消えていった。やたら強いバーボンによる酔いをさましに来た俺は、ワイングラスを一つひったくり、ベランダに立ち上がった。そして脇につけてあったライムライトを消し、それでこっちに気づいたナーシムに黙ってグラスを手渡した。少し間をおいてから、俺は遠くに見える町の灯を眺めながら、ぶっきらぼうに言った。

「よかったら…話、聞かせてくんねえかな」

彼女の父はフランス有数の良家に生まれた長男、母は鳥羽地方（註1）の何も無い農家の娘だったそうだ。鳥羽伏見の役（註2）の時、傭兵として参加したが負傷した父を助けたのが母。んでもってその後はお決まりのパターン…父は彼の父、つまりナーシムの祖父に結婚を申し入れるが、そいつはそれを許すはずがなく、2人の引き離しを計る。2人は逃げるように海外へ…そこへ生まれたのが彼女、ナーシム。これでそのジジイの追撃は終わるものと思われたが、奴の呪詛は彼女の名前に残った。世界最大の機関、“大ナボレオン＝オルディナトゥール”を裏操作し、彼女の戸籍に…一生虐げられ、石を投げつけられるよう、“追難（註3）”と入力したのだ。しかし外国計算機のパンチカードの限界から、“難”の字に“にんべん”は付けられなかった。そして、それがそのクソジジイの復讐の限界でもあったのだ。が、その行為はナーシムの心の中に永久に消えない深い傷をつけた。“運命”の与えたクソツタレな傷が。——

その後俺の身の上話でもしようかと思ったが、それ以上口を開くのはやめた。人は悲しくなった時、誰かに干渉してもらうより好きなだけ泣いて、何もかも流し落すのが悲しみを忘れるのに一番いいからだ。俺はナーシムに向かって親指を突き立てて見せ、こう言ってその場を立ち去った。

“You are you”

…俺はベッドに寝っ転がりながら、親父のこと、お袋のこと、波出子のことを考えていた。ほんの小さなきっかけから、殺し合うことになってしまった両親。何も悪いことはしてねえのに、どっかへ連れてかれてまだ帰ってこない、我が愛する妹波出子。…人はもっと強くなれるが、人の“弱さ”はなくなることはない…

俺は短くなったロウソクを握りつぶし～運命なんざクソくらえ～、シーツをかぶった。

I

“天災は忘れたころにやってくる”

差分機関の周りにむらがる技術者やクラッカー達の中、ポ一然と床にへたり込んだ俺の

頭に、そのことわざがよぎった。くそっ、正に言葉通りじゃねえか……何てこった。

その数十分前、俺はデータ解析途中の機関の様子を見に、機関室に操作マニュアル持って行った。結果はまだ出てなかったが、作業は快調に進んでいた。蒸気映像（ギノトロープ）ディスプレイのパンチカードを抜き取り、部屋を立ち去ろうとしたその瞬間、……

ボムッ

“大変だ、ボイラーがオーバーロードを……”

“早く火を降ろせっ！”

“しかし、そんなことをしたら機関のデータが！”

“馬鹿っそんなこと言ってる場合かっ！この街をゴーストタウンにしたいのか!?データは後で打ち直せばいい、早く火を！”

“……イエッサー”

黄色い非常灯がついた。しかし、さっきまでついていたライムライトの光に比べれば豆電球のような明るさ……薄暗い部屋の中、俺は歯車の音がなくなった機関と外の叫び声から、大体の今の状況を理解した。

データがブッ飛んだ……！

入力するだけで3、4日かかったのにそれをまたやれってのか!?せつかく解析ももうすぐ終わるところだったのに、またふりだしに戻ってやれだあ?……無理だ。俺にはこれ以上使える知力が残ってない。他のクラッカーにやらせようにも、機関の復旧作業だけで猫の手も借りたいほどだろう。おい神さんよお、“走り出す”にはまだ時が早いのか?

……あきらめよう。俺はまだこのことを完全に理解してないし、第一、いきなり攻撃しかけようにも、絶対奴らの妨害があるだろう。そこの問題点も考えなければならない。それに、やるべきことなら他にもいくらでもあるじゃねえか。頭を休める意味でも、ここは一旦手を引こうじゃねえか。“時”が来たらダッシュで仕事を片付ける。これでいいや。まだ勝利への道程は長いんだから……

“チョッコラチョイと パーにはなりやしねえ アッソレ ドンと行こうぜ ドンとね”

心なしか、俺の頭の中に植木等のドント節のサビが聞こえてきたような気がした。

## II

“Xeus”に飛ばされてから、もう3カ月が過ぎ、こっちじゃ5月。あっちじゃ12月……全く、月日が経つのは本当に早いもんだ。一度戻った奴の話によると、波津野は今大混乱に陥ってるそうだ。何でも、自衛隊の有坂駐屯地に8月できた大穴から、身長40メートルのペンギンが現れて自衛隊と“ゴジラごっこ”やってるらしい。怪獣は前にもクトゥルフもどきが出てた～全身ショッキングピンクと来たもんだ、全く……こいつ造った時空海賊のヘブタって野郎は一体何考えてんだ?～から大して驚かぬえが、ペンギンだあ?さてはサン○リーのまわしモンか?(笑)それとか、あの“竹槍片手に怪獣と戦っちゃうよ集団”(笑)時空防衛隊が時空回廊をふさぐ“時空消火器”なるガラクタ持ち出して、ディスコ“Xeus”のトランサーはもちろんのこと、波津野のありとあらゆる無許可時元回廊をふさいで回ったそうだ。ついでに言えば、マディ=ラングもなんとか法違反だとかで呼び出しくらったな。ま、一日で帰ってきたからいいけどよ……これでとうとう帰れなくなったかと思いきや、一週間ぐれえで穴が元通りになったとかで、全く竹槍集団だけあってんで役立たねえな、せめて六尺棒かトンファーにしてくれってんだよ、ったく。

きょうは、ディスコ“Xeus”の方でプライベートパーティやるとかで、ナーシムをはじめ多くの仲間達があっちに戻り、いつもなら俺達買物客でにぎわうはずの日本人街も、まるでゴーストタウンのようだ。……ゴーストタウンはちと大げさか。それでも前みたたく横浜駅の地下みてえな人通りは、あつとの南町商店街ぐれえのレベルにガクンと落ちている。ま、おかげでこっちは楽に調べモンできるからいいけどよ。

さっき刀屋のぞいてったんだけど、いやーえれー高いわな、刀。和泉守兼定(註4)なんか500ギニー(註5)だってよ……手も足も出せぬえな。何とか10ギニーの無名刀があったんで1本買ってはみたが……ダークブレイカーだけじゃちと心細いかな、ここ

は。さて、名前何にしようか……“斬魔剣”何てどーかな。

刀かつぎながら通りをさらに進むと、本屋があった。のぞいてみると、あっちの週刊明星みてえな黄表紙の本～めっき崩し字だから何書いてあんのかさっぱり分からん～とか、“南総里見八犬伝”第42版とか、世界史の本に世界地図帳とか……おっし、この2冊買ってみっか。何々……両方で5ポンド（註6）か、安い安い。

まず世界史の本“改訂新版よいこの世界史”……ん？終戦直後のガキどもの教科書みてえに墨だらけじゃんか。白いところは……何だ、内容要約すつと、“世界に起こった破滅戦争を止め、人類の救世主となった『遠い星の友達』のプロパガンダ”じゃねーか。戦争の被害状況なんか、これっぽっちも出ちゃいねえ。なーる、大して状況知らねえ多くの人々の感覚をマヒさせて、あっちの連中を味方と思わせる心理的侵略作戦か……ゼイリブみてえだな。けど、最初から刷らねえで墨塗りがしてあるところを見ると、政府が連中に強要してるみてえだな。クソツタしめ、んなデケネツラしてられんのも今のうちだぜ……時が熟したら、てめえらの首ねっこ叩つ切りに行つたるかな、今のうち首洗つとけやコラッ！

そのうち本を破いちまいそうなので、一旦その本はマントの下に持つてるザックに放り込み、地図帳をあける。……フンフン、エチオピアにシベリア、ブラジルにここと同じような都市があんのか。……じゃあ、そこにもクリスタル＝タワーがおっ立ってるってことか……これで連中の勢力がほぼ世界中に広がってることが分かったな。畜生、ざげやがって……！何かこっちの日本は、周りから別格扱いされているらしい。ま、こっちの日本にやまだ幕府があるんだし、時代おくれとでも見られてるんだろ。勝手にやらしときゃいい。

今日は“斬魔剣”（仮）に世界史の本と地図帳と、けっこうな収穫だったな。まあ、できれば次来た時、古本屋か何かで無修正の本手に入りゃいいんだけどな。あ、遊廓もあったから、遊びに行くのもいいな、ソーセージの皮（註7）持つてよ。たまってんから20枚ぐれえいるかな？うへへへへ……おっともう日が暮れる。早えとこ荷物ホテルに置いて、マディンとこ顔出さねえとな……

### III

今夜もマディの書齋の機関で、何人かが情報引き出そうとやつきになっていた。この世界、“情報”が肝心だかな。電気技師、通称“デンセンマン”（笑）の鬼塚の方はというと……前に処分したアンドロイド～“オートマトン”つつーそうだ～の動力源、反重力ユニットの情報だな。だが、奴に言わせりゃ“ユニットの能力を引き出すにはICがいるんですけど、それにはまずシリコンを掘り出して、その純度を99.9999999999までたかめなければならないんです。他にも小数点8桁まで純度を高めた超純水やNaイオンが全くないに等しいクリーンルームまでいるんです”……んー、何の事かさっぱり分からんが、とにかくそのユニットを本体から引っぱがして持つてきても、沿い津の農利欲を100%引き出すのは今とこ無理ってわけだ。他にも、写真技術とか製版技術もゼンゼン進んでないといった情けねえ情報ばっかで、我ながら肩がガクッリ落っこっちゃう感じだ。その代りと言っちゃ何だが、コンピューターの端末はあっちよりかなり使いやすらしく、マンインターフェイス何かあっちよりかなり進んでいるそう。俺はパソコンの知識はほとんどないので（筆者も同じ）、何がいいのかよく分からねえが、とにかくいいんだろ。それに、そこの機関が持つてるような多大な情報の数々、言わば“情報の海”に自分の脳を直接アクセスさせる、“情報の海に自分をダイブさせる”方法があるんだそう。そういう能力を持つ者を“ディファレンス＝ダイバー”と言うそう。もつとも、それには脳手術が必要らしい。危険度は少ないがね、いつものようにパイプをふかしながらマディはつけ加えた。ちなみに、ナーシムもディファレンス＝ダイバーの能力を持つているそう。……んー、こっちの世界じゃけっこー役立ちそうな能力だな。脳手術つてのが怪しそうだが……ま、気が向くか必要になったら志願してみんのもいいかも。俺はもうちょっとそのことについて聞いてみよう、マディの元に歩み寄ったが、そこで俺は彼が薄汚れた銀のロケットをさびしそうに見つめているのに気づいた。後ろからのぞき込むと、ピクトリアドレスを着たマブい女の小さな写真。

「へえっ、マブい女じゃねーか。嫁さんかい、ミスター・ラング……」

俺は軽い口調で話しかけた。

「ああ、マディでいいよ、ミスター・鬼崎……この女（人）は、あの連中が来た時……パニックに巻き込まれて……死んだ。私を独りおいて……逝ってしまった……今じゃ彼女が生きているのは、この小さなロケットの中だけさ……すまん、こんなしみつたれた話するつもりじゃなかった。どうか許してくれたまえ」

ロケットを見つめながら語るマディの姿は、まるでガスを抜いた風船のように、しぼんで、小さく、さびしかった。

「俺の方こそ蛇弥闇で、いや、ダミーでいいよ。人つてのはよ、誰でも悲しみを背負ってこの世を生きてんだ。そのムリヤリ背負わされた悲しみを食らって次なる幸福の糧にしてんのも人つてやつだ。俺も、……これ以上いらねえってくれえ悲しみつてやつを背負ってきたつもりさ。それがでかけりゃでかいほど、“次”はもっとでかくなるんじゃねえのか……マディさんよ。俺たちは“明日”のためにこうして戦ってるんじゃねえか。その道案内のあんたがそんなでどーすんだ？悲しむのはかまわねえ、あんたの勝手だ。けどよ、その前に俺達に一発気合入ったとこ見せてくれよ……今のあんたは指導者じゃねえ……ただのクソオヤジだ……」

「ほう、ダミー君……まだ25の若造の君が私のことをオヤジなどとぬかすのは、まだ早いんじゃないのかね？私はただ機関の前でのほほんと毎日を過ごすような存在ではまだない。少なくとも、妻の敵（かたき）を討つまではな」

マディはニヤリと笑って親指をつき立ててみせた。そうだ、あんたはそうでなきゃあな。それでこそ“Xeus”のリーダーだ。俺は笑い返し、オヤジがキバンじゃねーよと中指をおっ立てようとした。その時、デコラ張りの戸がバタンと派手に開き、使用人が飛び込んできた。何だ？かなりあわててるようだが……

「た、大変です!!ウエストコースト卿がここに来ています！」

「そうか、予想はしていたよ、派手にやったからな、通したまえ、トバイアス君」

「ウエストコースト？何者だそいつは。まさか“裏切り者”じゃあるめえな？」

俺は無意識にダークブレイカーを握りしめると、苦い顔をしているマディに尋ねた。

「……“Xeus”の情報統御者の中の情報統御者、腕利きのディファレンス・ダイバー。そして、世界で一番奴らに信頼されている男……“開国派”の長、ウエストコースト。きつとこの近くに、奴の居城巡洋艦“ハデス”が着陸しているだろう……ただでは済むまい」

淡々と語るマディ。その言葉には、真実だけが持つ“言葉の重み”がすべてにわたって存在していた。しかし、奴の艦の名前が妹と同じな前とはな……偶然とはいえ、胸クソ悪いな。そんな時、半開きになっていた戸が静かに開き、何人かの小柄な女を連れた黒マントに鼻眼鏡の男が現れた。あいつが、“裏切り者”ウエストコーストなのか……！

「勝手に通らせてもらったよ、マディ脚。お互い時間は節約したいからな」

奴が口を開いた。何ともクソいまましい声だぜ。つたく……

「時間がない、用件から言おう。“Xeus”のオルディナトウールに市民番号のない人民が何人かここにいるのは分かっている。その方々を私の家に招待しようと思ってる」

机の上に“Invitation card”（招待状）となぐり書きされた封筒を置くウエスト脚。

「何のことかさっぱり分からんね、ウエスト脚。“世界の平和”のためかね？」

皮肉っぽくマディが言い返す。

「そうだ、マディ脚。“彼ら”が来て、我々はやっとな赤痢やチフス、くだらん世界戦争に内乱から解放されたのだぞ」

「人間としての尊厳もな、ウエスト脚。今、虚無感が世界をおおっている。麻薬、ニヒリズム、その他諸々のFuck'n Thing（クソツタレなもの）が世界を腐食させている……今の状況では、我々の手に未来は無い」

マディが気合の入りまくった目付きで奴にガンつけると、奴は片手を挙げた。すると、鈍い破裂音が！デリンジャー？連発銃？俺はとっさにマディを押し倒すとダークブレイカ

一を抜き放ち、膝をついて下段に構えた……それっきり俺は凍りついて動けなくなってしまう。

複数の銃口が俺達にピッタリ標準を合わせていた。見ると、ウエスト脚の脇にいた女の顔が真っ二つに割れて中から胸クソ悪い色した45口径ぐれえの銃口とレンズが飛び出している。……戦闘オートマトンか？

「言葉遊びなどしている暇は無い。さあ、お客はどこに消えた？言ってもらおうか！」

勝ち誇った口調のウエストコースト。畜生、あのオートマトンさえいなけりゃ、このダークブレイカーであの野郎の首へシ折ってやれるんだが……

「さあね、探したければ勝手にするがいい」

ここに俺達が5人ばかりいるってのに余裕のマディ。早速連中が機関に向かうが……マディはそのスキに、俺達にウインクしてみせた。対策はバッチシ、てわけか……やるねえ、全く。

結局何も見つけられなかったウエストコースト脚はオートマトンに入つ当たりしながら帰っていった。へっ、いい気味だぜ。てめーらが俺達をとっ捕まえるなんて、10億年早えぜ！

## Epilogue

「……どうする、マディ。先制パンチ食らわすかい？」

あの後すぐ駆けつけたエリスタン～エリスは通称で、エリスタンが本名だそうだがマディに言った。あの封筒の中の紙つきれには、俺達を奴の飛行巡洋艦“ハデス”に招待する、と言った文面が書かれていた。

「せ、先制パンチって……まさか戦艦に？」

一緒にいた相原って男が恐る恐るマディに尋ねた。そこでマディは立ち上がり、口調を強めて俺達に言った。

「我々だってただ口開けて待ってた訳じゃない。飛ぶのさ、飛行機械で……」

そう言うマディはニヤリと笑ってみせた。飛行機械ってと……あの砂漠にいた時見た、銀色の翼のない飛行機のことか。ほう、あいつに乗って御礼参りか……こいつあ面白くなってきたぜ。

「今日、ディスコの方から新たな援軍が来るはずだ。……ほら、着いたようだ。この部屋に時空孔をセットしておいた」

エリスタンが天井を指差すと、何も無いところから突然黒い孔が出現し、ディスコの客らしい何人かの人々がドサドサと落ちてきた。

「だあーっ！何だーここはー!!どこなんだー！」

……叫んでるアホウが約1名。こいつらも、俺達同様いきなり連れて来られたようだ。砂漠に実体化しなかつただけ幸運と思うんだな……！まあともかく、味方も増えたことだし、奴らに一発カマしてやる時がついに来たわけだ。マディとエリスタンは顔を両手でパシとはたいて、気合入れている。俺はというと、ひたすら深呼吸をしていた。聞こえは悪いが、気合入れて力ためるには、この方法が一番いいのだ。

「やるしかないな……」

「やってやるぜ……！」

おのおの覚悟を決めたようだ。ま、さっき来たばっかしの連中は別だが……よーし！ちよどでけえのをドバーンとカマしたるかあ!!

そんな時、悲劇は起こった。

開きっぱなしになっていた時空孔から、もう1人、女が落っこちてきた。エリスタンが哀れにもクッションになったんで怪我はないようだが……その女を見たとき、みるみるうちに引きつるマディの顔！

「ねー、ここどこ？地下なの？“Xeus”の……」

ディスコ“Xeus”の常連、“独裁市長”石黒のアーパー娘、“完全天動説女”石黒嶺子……決して連れてきてはいけない人物を、とうとうこの世界に巻き込んでしまった……！



「しまった！要注意人物No.1を巻き込んでしまった!!」

思わず叫ぶエリスタン。

ああ……頭痛え……

BGM: Don't cry (by Guns'n'Roses) ～ ドント節 (by Hitoshi Ueki) ～  
Standing Sex (by X)

To be continued...

註1：京都南部～南伏見二区に渡る地名。鳥羽伏見の役の戦場。

註2：1868年1月27日起こった旧幕府軍と倒幕軍との戦争。戊辰戦争の発端。倒幕側の大勝に終わる。

註3：平安時代、大晦日に宮中で行なわれた、悪鬼・疫癘を追い払う行事。石を投げられたり罵られたりして追い払われる悪鬼の役を“追儼鬼”という。

註4：刀の名前。それだけ。

註5：イギリスの通貨。1ギニー＝21シリング＝約10500円（編註：謝礼、美術品等の売買に用いられる）

註6：同じくイギリスの通貨。1ポンド＝20シリング＝約10000円。（編註：現在シリングは廃止され、1ポンド＝100ペンス）

註7：19世紀は羊や豚の腸をコンドームに使っていた。すぐすり切れるらしい。

#### あとの悪あがき

ドーも、メリークリスマスです……ってこれが文章になってる頃にもうとつくに年明けてるか……うーんマヌケだな。

つーわけで、今回は編集部の皆さんからもクレームがついた（笑）鬼崎のフリー設定です。一見俺の趣味（モダンホラー）丸出しですが、俺の実体験や俺の内面的性格なんかをふんだんにとり入れてあります。編集部の方々にも、こいつがたった1日で造り上げたからって何も考えてないわけじゃないことを、どうかご理解いただきたい。つーわけで、今回はこのへんで……みなさんよいお年を（あ、またボケた）

12月29日

“那由多の回しもの”（笑） 鹿島久義

1966年6月6日、横浜の某産婦人科で鬼崎家長男、蛇弥闇誕生。父―戸陰流剣術師範代にして外交官、母―宗教家、アメリカ人。彼女の宗教は“新興宗教サタニア”いわゆる悪魔崇拝である。生まれた直後日本を離れ、アメリカ、イギリス、インドを始め10歳の時帰国するまでに多数の国々を転々とし、その間に6宗教6ヶ国語、戸陰流剣術基本型及び神学、悪魔学をほぼマスター。また、次男の留死不破、長女波呂子もその頃生まれた。

帰国直後、両親変死。死因は、父―ナイフのようなものによる刺殺。母―同一のナイフによって心臓をえぐり出す。母が何らかの理由で父を刺殺、自らも自殺と見なされ捜査がなされるが手がかりのないまま時効。真相は、1966年6月6日に生まれた蛇弥闇を悪魔の申し子として目ざめさせんが為、信仰対象のサタンに“いけにえ”を捧げた、というもの。“蛇弥闇”の名もそれを意識して母がつけた。しかし彼は逆に、両親を結果的に殺した悪魔を憎むようになった。いつか悪魔を殺してやろうと思いついた。

伯父の家に兄弟共々引きとられ、私立中学に入学したが弟の溺死、妹の失踪、伯父夫婦の変死（刺殺）と彼の周りに怨劇が重なり、ぐれた彼は自ら“悪魔退治”と称して父の形見でもある木刀～後に改造して聖剣ダークブレイカーとなる～片手に族符りの毎日にあけくれた。

高卒直前に神学の教えを思い出して何とか更生、K大学神学部悪魔学科に入学、昨年（90年）主席で卒業、同時にローマ法王庁を訪れ、正式に神父と悪魔敵い師（エクソシスト）の資格をとる。今年（91年）6月に波津野市に移住、9月に市郊外に立つマンシ

ヨン“シュレッサー波津野”の2号館402号室に移転、同101号室にトラブル相談所を開き経営を始めるが、その月から異世界“Xeus”に移転、現在そこで生活している。

黒マントに黒のスーツ、グラサンに火のついたマルポロをくわえ、ダークブレイカーを背にかつぐといった姿が普段の格好である。黒のショートマントにタキシードの正装や拳法着を改造した戦闘服もあるがグラサンだけは一時も離さない。母と同じ眼—コバルトブルーの眼にコンプレックスを持っているからだ。一本気の正義バカで、“悪”は絶対許さない現代においてはかなりハタ迷惑な性格ではある。内面の暗さをさとらせないよう、いつもホットな面を見せている。ちなみに口の悪さは最悪だった中・高の名残である。女・子供は、特に純粋な人には弱い、そういう人々にはできるだけ尽くそうとするし傷つけているところを見ると、傷つけた者に対して最大限の怒りを発する。自ら“悪魔退治人”を名乗るほど悪魔退治を生きがいにしており、ギャンブルにヘヴィメタが大好き。嫌いな物は悪魔、悪人、“悪”、ふぬけ。好きな言葉は“悪は許さん”嫌いな言葉は“絶望”“悪”“貧乏（笑）”。

身長206cm、体重65kg、視力2.5（両）、血液型AB（Rh-）

愛の対象：妹の波出子

外面的破壊主義者

ワープロ代行・香津美どぶろくから

岬氏がついに「ホラー・アレルギー」を起こしたので、引き継ぎました。活字が一緒だけど、これは提督のマイリポート（岬氏と同機種）を借りてるから。…今、すぐ横では提督達が「真鶴」の処理会議中です。今さっきまでPBM「A-Strike」の処理作業をやってました。ちなみに私は、ワープロ持ってません。でもバイトはワープロ打ち♡

さてみなさん、ここまでちゃんと読んでいればお気づきになったことがあると思います。何箇所か、修辞におかしいところがあるんですよ。あともう一つ、一頁目のまん中へん、ナーシムの爺さんって、彼女の母方のほうじゃない？でないとただでさえ“？”な話が、余計“？”に見えるんだけど…。だってねえ、フランス良家の人間が“カンジ”だの日本の旧習だのを知ってるとは考えにくいし。あとさあ、イギリス文化圏なんですよ、“Xeus”って。だったら通貨単位はドル・セントじゃなくてポンド・ペンスじゃない？…それに無理に凝った表現を使って、逆効果になっているのも幾つかあるね。もの書きはそういう失敗で大きくなってくものだけど、今後に期待。

そうそう、余談ですがクレイジー・キャッツ（植木等）の使い方には充分気をつけてね。提督が大ファンで、使い方が下手だと逆上するから。彼も大人だし、歌詞の間違い程度じゃどうってことないんだけど（でも今回のドント節はヤバかった）。

横浜空技のスタッフには、「セルロイドの臭い（円谷的なノリすべて）」が嫌いな面々が揃っています。だから那由多にもあんまり好意的じゃないんだとおもう。「鉄の臭い」は好きらしいんだけど、ねえ。

# 真鶴レポート

(おお……うおお……)

摂心の間じゅう、そしてその後数日、初雁の頭の中ではそんな意味のない文字ばかりが乱舞していた。当番の警策が連日強いものばかりだったのだ。運が悪いことこの上ない。友達の一人、伊藤早苗など「5勝2敗だった」というのに……。最後の方では右肩にうっすらと青いものが浮かんできていた。下手な人間が派手に音を出してやろうとすると、やはりその辺で無理がかかるのだ。慣れたものがやると痛みは鋭いが、そう続きはしない。

げ、アザだ！

彼女もかなり焦ったものである。だがそれよりも、肩の筋肉の鈍痛の方が長引いていた。期末試験だというのに……。

坂井法子は飽きもせず男子部F-16への挑戦を続けている。言うまでもなく、男子部極め付けのアウトロー、影山翔に一矢報いるためだ。

(そう言えば、ヤツの機体がどんなかまだわかんないんだよね)

ある日男子部へ向かっていて、ふとそんな事を思ったときである。今までとは一風変わったF-16が、自分から飛び込んできた。尾翼には魔方陣をバックにした、少し昔の何とかメビウスとかいうマンガの主人公。……実はこれが影山機だった。

(まさか、こんなオタッキーが!?)

そう思いながらも増槽を投下して、自らも戦闘態勢に入る。フル・バーナー。

しかし結果はあっけなかった。F-11で格闘戦をいどんだところで、余程運が良くなければF-16には勝てはしない。決め手も何も無い。あっという間に後につかれて、それで終わりだった。

「顔洗って出直してこい。いつでも相手してやるぞ！」

彼の一言が彼女に届いていたかどうかは疑わしい。

女子部からの影山に対する挑戦は更に続く。今度は中学からだった。「暴走を止めないと、いずれ自分たちにも火の粉がかかる」と危険を感じた井村真知子は、県内の知り合いに連絡をとって海空からの連携攻撃をかけることにした。だが、これは実行されなかった。初雁が中止させたのである。

E A-6 BのECM援助を受けながら知り合いのSu-27二機が侵入。これで襲う。逆に撃墜された時のために、飛行艇と自分の船が待機する。そういう計画と聞いた彼女は、わざわざ寮の彼女の部屋に乗り込んで止めるように注意した。

「他力本願てのが気に入らないわね。校外の人間に頼ったところで、今度はそっちの学校に迷惑がかかるでしょ。影山の部下は一人見たら裏に30人はいる規模だっていうし。どうせやんなら坂井さんみたいに自分でやんなさい。別にMSだからって飛行機に乗っちゃいけないんでもないし。やるのは自由だけど……そんな時や私のローランドとシーハリアー隊が黙ってないからね」

確かにそうかも知れない。考え直した井村は、あっさり取り止めた。

影山に負けたあと、坂井はすぐにMF主将の栗田はるなに上申した。

「クルセイダーを！F-8Jを私に下さい！」「なんで？」

熱っぽくなっていた彼女に、しかしはるなは素っ気なかった。

「限界が見えてるからでしょ？」

———鋭い。さすがに年と経験の差はダテじゃない。坂井は思ったが、実は母艦の艦長、本庄から双子の姉の榛名を通じて彼女に話が行っていただけだ。

「影山対策にしても、そう無闇やたらに変更できるわけないでしょ。腕でカバーなさい」

「それは先輩は、中学からイーグルに乗ってるから、そんな……」

「じゃイーブンの条件でケンカしましょ。それであなたが勝ったら、今すぐでも変えてあげる。何なら私が自費で、欲しいのを買ったげてもいいけどね」

(う)

さすがにためらう坂井であった。

結局、お互いF-16で模擬空戦を行なうことになった。はじめ坂井は両者F-8を使うことを希望したのだが、「敵はF-16なんだから、いずれ同じものが欲しくなるはず」と言うはるなの意見が通ったのである。天狗と鷲の対決と言ってもいい。観測機はシーハリアーの伊藤早苗（坂井の友人）とイーグルの長門洋子（はるなの親友代表）が務めたが、多分そんなものは要らなかっただろう。

ノン・バーナーで並んで上昇し、高度8kmに達したら自由空戦。無制限一本勝負。

16の出力重量比は並大抵のものではないから、すぐに8kmに達した。右へロールしながらフル・バーナーにスロットルを叩きこんで高度と距離を稼ごうとした坂井の耳に、いきなり「一本！」と声が飛び込んだ。まだ彼女は何もしていない。見れば、見事なテール・トゥ・ノーズではるな機がピッタリつけている。これなら少しロールするだけで誰にでもできる奇襲だ。

「男子部で何遊んでたの。動きがトロくてアクビが出るわ」

さすがにカチンと来る坂井。反論しようとしたが、はるなはすぐ告げた。

「つまらないからもっかい来なさい！」

「望むところお！」

多分に武家の血が流れている坂井のことだから、こんな手で負けを認める気にはなれなかった。左にロールしていくはるな機の後へ機首を持っていく。急旋回のGで体が抑えつけられるが、何とか後にはつけられた。……と、はるな機は忽然と姿を消してしまった。

(まさか！)

ハットとなる間もなくまた一本。坂井の危惧は当たっていた。伝説の技法、「木の葉落し」である。エア・ブレイキを立てて急激に横転すると、機体は揚力を失って一機に落ちる。そのままだとキリモミに陥って墜落だが、タイミングを取って姿勢を立て直すと絶好の攻撃位置、敵機の真後を捉えられるのだ。比較的軽いF-16では沈下スピードも低いので少し難しいが、とにかく坂井は2連敗となった。完全に血が頭に登った。

「もう一本！」

はるなはもう一度坂井から離れた。後からだけではつまらない。そう考えたはるなは、正面からの正対戦を仕掛けた。これなら坂井にも、とりあえずチャンスはやれる。

うまい具合に予定通り事が運ぶから、はるなの技量恐るべしであろう。しかもわざとこ

うされたことを、坂井は遂に見抜けなかった。真正面から衝突コースで両者が突っ込む。果たして勝者は……はるなだった。

ギリギリまでお互い引き金を引かなかったのだが、いつまでも泰然と直進するはるなに、坂井の方が恐怖を覚えてかわしたのだった。胴体を斜に走ったペイント弾が何よりの証拠である。かくして失意の彼女はF11Fタイガーのままとなった。

「何も本気出すこと無かったんじゃない？」

「いいよ、そのぐらいしないと余計天狗になって手がつけられなくなるから。しばらくはこれで落ち着くでしょ」

はるなと長門の会話だが、実は落ち着くどころの騒ぎではなかった。今までの男子部通いもプツリ止んで、すっかりふさぎ込んでしまったのだから。それが幾分もとに戻りだすまでに、試験休みまでかかった。伊藤の部屋で加越も交えて、モノポリーを始めてからである。

「……5、6、やった梅田！ 買い買い！」 「パークプレースでしょ！」

高額地2つを揃えた坂井はさすがに強かった。並びの3つと併せて一列を制し、ホテル魔（王ではなく）に押し上がってしまったのである。逆にGoの横の低額地、電気水道にこだわった加越の没落は早かった。鉄道4社を押さえた伊藤は持ち主の対面を維持するに留まったが。

さて、初雁の奇行が始まったのは、その休みに入ったころからである。試験の始まる少し前から、ふつつり誰とも付き合わなくなり始め、暇さえあれば学校敷地の測量と計算機に没頭するようになったのだ。しまいには寮の自前の98RXまで使いだした。真面目は真面目でも、試験勉強に余念が無い伊藤とはちょっと様子が違う。余談だが、計算機は祖父譲りのカシオの古い関数計算機である。博物館ものの逸品だ。

休みに入ると、行動は俄然アクティブになった。主港を少し外れたあたりをいきなりスコップで掘り出したのだ。加越が何か知っているらしいのだが、他の誰にも話そうとしない。やがて彼女は、自分のM1戦車を持ち出してきて、掘った溝の下をならし始めた。等身大で掘った跡は、1/72の戦車が3台ほど並んで入れる大きさである。そのうち宇垣の手下が手を貸しはじめた。事がここに至って、風紀委員会が動いた。直接行動にでたのは試験休みの最終日だったが、この時までには100mほどに達していた。

「地下鉄工事ですよ」

初雁の答えは単純明快だった。掘った溝に太めのポリパイプを埋めて、中に線路を敷いていくつもりと言う。となると、事は交通研究同好会の会長、南雲陸奥の方に話が及ぶ。結局初雁一人の勝手な行動ということに落ち着いて、溝は埋め戻された。

新学期に入ってすぐのある日、影山がF-16の遠乗りに堪能して滑走路に戻ってくると、縮小機の横で真鶴の総番、宇垣麻美が待っていた。少し離れたところで女子部マーキングのCH-53輸送ヘリ——宇垣用の連絡機——がエンジンを停めて駐機している。……彼女の方から声をかけてきた。何かと、周りの控えめな視線がちらちらと集まってくる。

「ちょっと用があんだけどね」

「こっちにやねえよ」

「そっちの都合なんか聞いてねえよ」

腕組みして縮小機の通路をふさぐ宇垣。彼女は顔だけは笑って、あごでヘリの方を示した。襲いかかるスキはない。また、女に手を上げる趣味も影山にはない。

「まあ、そんなに手間は取らねえよ。取って食うわけでもねえ」

とりあえずつきあってみることにした。ヘリの中はこれがどうやったのか畳敷きになっていて、ご丁寧に木のちゃぶだいまである。彼女の歳から言ったら変を通りこして妙な趣味とも言える。逆に性格から言っ、「らしい」とも言える。何せ女次郎長である。

「用ってなんだ」

「まあそう焦りなさんな。茶でもどうだい」

「……ざけんな！」

一瞬激発した彼だったが、あいも変わらぬ宇垣のスキのない余裕に感情の方が飲み込まれてしまった。

「……ココアくれ」

……出されたココアは恐ろしく濃く、また熱かったが、彼は我慢した。

「手下を使って、あんたについて調べさせてもらったよ」彼女は自分の煎茶を淹れながら、一人で話を切りだした。彼の方は見ていないが、やはりスキはない。「……ぐれるわけだ」

「何のことだ」

表面上無表情を装ったが、正直動揺した。まさか、あのことまで調べられたのか。昔の嫌な思い出まで。

「まあいいじゃんか。……飲みなよ。別に変なもの入れてねえから」

相変わらず宇垣は人のよさそうな微笑を浮かべている。何も知らなければ総番とはとても思えない。影山がいやな顔をするにもかかわらず、彼女はショートピースに火をつけた。

「うちの縄張を荒らすのあ勝手だけどさ。一応、カタギの生徒には手エ出すなよな。迷惑だから。それにここの生徒は坊ちゃん嬢ちゃんが多いから、ブルっちまう。……必要な時に役に立たねえしよ、ルールつてもんはわきまえねえとな」

容赦なく煙を吐き出すので、ヘリの機内はすぐに煙くなってきた。

「用はそれだけか。だったら出てくぞ」

「ああ、手間取らせたね。……時に、あんたの返事は？」

「オレはオレのやり方で行く」

奇妙な会見はそれでありになった。少しして、宇垣のヘリも母艦へ帰っていった。

今回のPC（1保留）

高校 男子部 普通科

A組 影山 翔 （勝 譲二） 竜野 了

理数科

H組 沖田 悟 菅原 絵馬 鳩山 平和

女子部 普通科

A組 伊藤 早苗 加越 京子 坂井 法子 初雁 つぼめ

中学 女子部 A組 井村 真知子 早坂 理絵 白根 こだま 有明 みどり

## その他のリアクション

### ・影山翔

行動が怪しい沖田の身辺調査をはじめ。手下の報告でガスを使うらしいことを察知して、靴の中にアロンアルファで画鋲をつけるなど、細かな嫌がらせを開始。副産物で菅原のこともキャッチ。こちらは「つまらんことはするなよ」と警告するに留まる。

### ・竜野了

空手部入部。模型部はMA、FAL装備の歩兵班に編入。空手部内でその気のありそうな連中に、少林寺拳法部をつくろうと持ちかけはじめる。反応は「少しいい」程度。

### ・沖田悟

実家かから「古い」白衣を送ってもらおうとしたものの、密封すらできない異臭が問題となってどこでも受け付けられなかった。残りの白衣も風紀委員会によって新品に交換される。あげくの果てには異臭を何とかしない限り、再び実験を阻止すると通達された。

### ・鳩山平和

科学部に入部。影山のことを聞いて催涙ガスの開発に着手。それにあたってまず、防毒マスクの研究から始めた。模型部はMS。キッド級ミサイル駆逐艦「DDG-32」の艦長。尊敬する化学者から、「パウル・ヘルマン・ミュラー」（DDTの発明者）と命名。

### ・菅原絵馬

期末終了後、打ち上げを企画。伊藤たちを誘うが、今一つ動機が明らかでないのとモノポリーとの関係で、乗ってこなかった。飲酒がばれて寮内謹慎のまま年を越す。

### ・伊藤早苗

期末試験に向けてトップを狙い、死ぬ気で勉強する。……が、無理がたたって後半は体調を崩し、平均としては平凡に留まった。前半行なわれた現国、地理、数Ⅰ、生物だけが異様に高い点だったのでカンニングの疑いをかけられたものの、無罪放免。試験休み中の行動で、初雁には「モノポリーおばさん」と事ある毎に言われる破目になる。のち人生ゲームでは立場が逆転。冬休みに牛岳でスキーをやろうと持ちかけるが、近場の加越しか乗ってこなかった。

### ・加越京子

伊藤の部屋でモノポリーに浸り、親睦を深める。常に一番早く没落する側だった。さらに人生ゲームではタレントをやるが、株の暴落でバブルがはじけ、「千昌夫現象」を発生。約束手形十数枚は充分ギャグになった。冬休みは伊藤と牛岳でスキー。暮れに帰って冬コミへ行く。二日たて続けてナディアのコスプレをやり、風邪をひき込む。

### ・坂井法子

モノポリーではホテル魔となる。これで何とか精神的に持ち直したが、まだふさぎ込み

傾向そのものはなおっていない。和歌山の実家へはバイクで帰った。近くの知り合いに預けていたもの。初日の出は曇りで拝めなかった。

・初雁つばめ

汚名撤回、試験では5番まで申し上がる。冬休み中には大阪まで進出、鉄道科学館を3日かけてじっくり「しゃぶって」回る。

・有明みどり

パソコンが使えるというだけで物理部に入る。Hソフトをこしらえて冬コミに持込み、相当の富を築いた。ただしこれが加越に見つかり、以後舎弟同然になった。模型部はMS。海自「あさぎり」級駆逐艦「ゆきかぜ」（艦長 中2、島原郁子）のレーダー担当。

・井村真知子

伊藤早苗と接触。ときおり彼女のシーハリアーに乗せてもらい、飛行感覚をつかむべく練習を開始した。月の後半には自分の艦に機体を持ってきてもらい、そこからの離着陸をこなすまでになった。

・早坂理絵

放送委員会に入る。ただし、中学ということもあって下働きが主であり、心に抱くプロジェクトは実行できないでいる。模型部はMF。持込みのF-100Dのまま認定。サンダーバズ風の塗り別け。「のりピーむし」が垂直尾翼に描かれている。茶目っ気で坂井のF11Fをあおるが、坂井は一番「油が乗った」時期でもあり、地上に降りてからボロクソに罵られた。

・白根こだま

風紀委員会に入る。活動らしい活動は特になかった。模型部は当然MA。G3小銃装備の歩兵班に編入。

知ってて得する真鶴豆知識

・バイクなどの持込みについて…自転車は無いと街へ買い出しに行ったりするとき困るのでOKですが（バスもあるけど）、バイクは駄目です。ただし近所の知り合いに預けるとか、そういうのなら学校へ乗り付けるのでないかぎり、OK/でしょう。規制のしようがないから。…近所で違法行為かなんかで捕まった時は、厳罰が下るでしょうね。

・風紀委員会の編成…まず、一番上が「執行部」。学内の事情に精通しているということで、中1からいた生徒だけ。次が「親衛隊」。これは2年以上在籍した者のみです。オチのSS（同じか）みたいなもんですね。族関係への「手入れ」は彼らがやります。んでもって一般委員のグループがあって、下っ端が「憲兵隊」。彼らは風紀委員が常時監視する必要ありと認めた要注意人物の寄せ集めで、班長（親衛隊から来る）以外は全員、何の仕事が与えられるわけでもありません。



## 校長から

ああ、結局今回も試験問題は間にあわなかった。申し訳ない！何せASのグランドマスターとか、普段ない仕事が多かったからね。にしても臘八摂心(ろうはつせっしん)はつまんなかったなあ。出るか出ないかなんだもん。一人ぐらい「最終日だけ出てまんじゅうもらう」とか言ってくるかと思ったのに。

…で、そろそろ言わなきゃならんかな。各自、自分のアクションが全体に何の影響を及ぼすか、それを考えてコマンドをかけるようにして下さい。自分だけにしか意味の無い行動は避けるように。これはU○体なりクレギオンなりをやってる人なら耳にタコができるほど言われていることですが。全体リプレイ小説が書けないんですよ。それと、影山対策にこだわるなっつーの！話がそればっかになってつまらんでしょうが。もっともこっちはそれなりのイベントを用意できない我々の責任かもね。

そうそう、リプレイにも書いたけど、宇垣がある情報を入手しました。これが彼女の動き方にどんな影響を与えるか…それは、ヒ・ミ・ツ！（オエ）

あとねえ。私はあんまりアクティブな文体はできないんよ。今回の空戦シーンも、本居「原作者大先生」にやってもらった位だしね。

そして、水増しキャラを造ってくれたスタッフに。何か気付いたことがあったら、すぐコマンドをかけて下さい。でないところちが都合いいように勝手に動かしちゃいますので。

「架空の人物や本は出したらいけないのか」という質問がありましたが、原作の「榛名とはるな」に出ていないかぎり原則としてダメです。他の人がわからないし、こっちの「場」を崩すので。…それができるのなら、とっくに出しておきたいキャラがこっちにもあるんです。風紀委員長の三河とか、風紀OBでエスパーの勅使河原とか。…知らないでしょ。未連載分で書き上がってる部分を読ませてもらったら、こういうのが出て「榛名～」が銀英伝の同盟末期のころみたくなくなってくんですよ。…やっちゃおうかなあ。それだとイベント作りが大分ラクになるんだけど。今までもその前提で風紀を動かしてたけど、固有名詞が出せるってのは大きいからね。

## 4月特別編集号のお知らせ

何事かとお思いでしょうが、ちょっと重要なお知らせです。空技廠の活動にいろいろ影の面で助けてくれている田中“ヤグアル”真人氏の進路が、今度の春に決まる予定です。でもって、彼の希望でもあり、とりあえずそのご祝儀という意味もかねて一号だけ彼に編集作業を全面委任することにしました。これはあくまで進路が決定了ららの話ですが、いきなりやると混乱を招くので今から発表しておきます。

彼は現住所の横浜市内から瀬戸内地方へ引っ越す予定らしいので、スタッフの皆さんは指定の締切日を厳守するように努力して下さい。…まだですけどね。

それからASの方で次号の原稿締切日を1/31としましたが、これはいくら何でもムリだと思うので、2/22に再設定します。とにかく守ってね。このところみんなうつ状態になっているので、遅れるととことんまで遅くなりますから。 (菊地)

# ■ PINK GIRL ■

女の子イラスト本

# ■ GREEN BOY ■

男の子イラスト本

A5 オフ P44 表紙2色、紙替・インク替有。

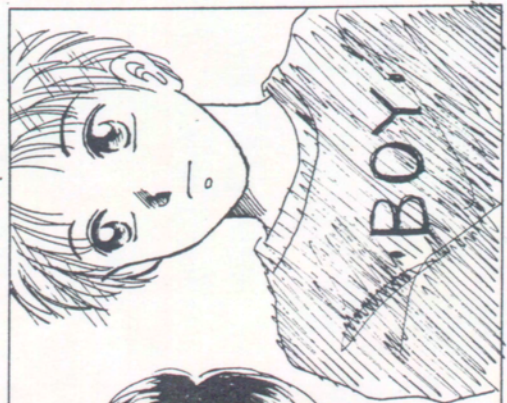
(両誌共)

- 1冊 500円(無記名小替為) + 62円切手
- 2冊 900円(無記名小替為) + 62円切手

↑差額は切手で返します。

※2冊お申し込みの場合、値段が変更されるかもしれませんが。(高くはないはずです)

執筆者: 吉野健彦、龍兵器、速水練旋人、  
南由希絵、森下信宏、神巳美羽、河野克己、  
梧桐、くさみ義隆、伏喜珠緒、鳥海朗、  
東海林ちや、滝沢和、海天瞳晶、剣持卯月、  
陣内拓也、珠まさよし、Y-あ、音沢夏美、  
瀬類納悠、早瀬あさみ、くあん摩緒、鷹野慶、  
……(敬称略、川頁不同)+ ただのりな

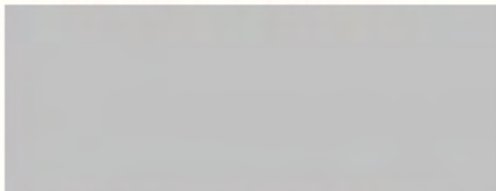


※両誌共、約20名の執筆者さんか参加して  
います。個性的でいろいろなための男の子・  
女の子のイラストがざっしりです。

※この本が何冊ほしいのか(男の子本と女の子本  
は別々の本です)は、きりかいて下さい。

※男の子本と女の子本では多少執筆者が異なり  
ますのであらかじめご了承ください。

▽あて先(下記の住所は2月末まで  
有効。以降は変更になります。)



テマは  
・健気  
・明るい  
・たかひい  
てろッ

RINA

# コミケレポート！

報告者：岬当麻

……ええと、行って参りました。12月30日の「コミックマーケット41」。親父と私の二人で。晴海は私も久しぶりだったのですが、一頃よりは混まなくなってきたのが「ああ、ここにも規制の手が……」と思わせたものです。今回二人で行ったのには、ちゃんとわけがあります。以下、順を追って報告していきましょう。

**任務①パノラマアワー5を探せ。**

ゲーム関連のサークルはB館に集められていた。当初東館のアニメ系から攻めて任務②を先に仕上げようとしていたが、入場口がB館向いのC館だったため、予定を変更。

「エイルナ電腦工房」（旧称 鈴木商店）のブースは入ってすぐのところ。このテの交渉を角を立てずに進めることのできる親父が出ていく。

親父：えーと、鈴木商店さんはこちらでいいんですか？（いきなり攻撃的な態度）

しかし、標的の羽村はいなかった。「今日は来てない」ということでかわされてしまう。いきなり任務失敗。

**任務②K A F Cへの義理を果たせ。**

「Blowers 4」を置かせてもらった恩もあるので、混まないうちにすぐ東館へ向かう。まさか学校の名前を出す訳にもいかないので、変名「PAX JAPONICA」で参加している。……ブースナンバーの確認が難しいのでかなり迷い、東館に入って30分ほどしてようやく到着。しかし、一冊も売れていなかった（11時30分ごろ）。やはりゲーム系の本をアニメ・創作系に置いたのはまずかったか。

**任務③「いのうえとみい」と接触せよ。**

「ゲームグラフィックスの常連をツモれ」計画第2単として発動したこの作戦、彼のブースそのものは空いていたのだが、彼本人がかなり人気者になっていたので中止。

**任務④Blowersの絵描き職人候補を探せ。**

主にB館のゲーム・ミリタリー系を搜索し、不安定な現行の絵描き3人体制を改善すべく実行したこの作戦、どうやら2サークルに渡りをつけることに成功。うまくいけばコミケの販売態勢強化も同時にはかれることとなろう。唯一の成功である。

**任務⑤「浪速愛」の同人誌を漁れ。**

これは単に私の趣味。本人がいるなどとは最初から思っていないので、サインは期待していなかったものの、お目当ての本の一部が品切れで入手できず。これも失敗点だろう。

## 結論

今回のコミケはどうも低調気味に映った。社会の目がなお厳しいことと併せて、何のために本を造り、何のためにコミケに出るのか、その目標を参加者の多くが見失いつつある点に問題点は求められるであろう。一頃ほど同人誌を出版させ、あるいはコスプレを行なわせるに足るほどの情熱をかきたてる、パワーのある作品そのものが数少なくなってきた現在の現状にも問題点は数多い。旧作にしがみつき、今までの情性で本を出し、コミケに参加する——そのこと自体が目的化してしまっているのである。これは単なる手段にすぎず、本質はもっと別のところに求められなければならない。「○○という作品がスキだ、だからコミケに行ってそれを表現してくる」これは構わない。しかし、「コミケに行く、そこで自分がスキなものを表現する」これは似ているようで違うのである。

さて、次回の夏コミ「コミックマーケット42」はどんな現状を呈するであろう。

# 仮設投稿コーナー

まずは先号の蔵田さんの、会誌についての意見について。

☆蔵田君の意見について、残念ながら僕も蔵田君と同意見です。

で、提案として……前回せっかくアンケートを取ったのだから、アンケートの内容(?)結果等載せてもよかったのでは?ただしこれは他のサークル誌などでも行なってることなので、下手すればマンネリも考えられますが……

しかし参加者(読者)は自分の名前が載るとうれしいものです。今のように小説ばかりで参加者の参加スペースが無いのより、多少なりとも参加スペースを与える方が、(参加者の)ヤル気が出るのではないのでしょうか?(以下略) (千葉県・小西清彦)

㊦:……これはともかく、これはうちがその事についてまったく情報を出さなかったことに非があるでしょう。

我々(というか私個人)が読者コーナー常設にあまり積極的でないことには、一応理由があります。まあ、今になってからじゃもう言い訳にもならないと思いますが、今後何か「いい影響」を導けることを期待して書きます。(ああ嫌だな、こういう文体)

どういうわけか私がかんでる「読者コーナー」という物には、手紙が来ないのです。小西さんとは以前他の本でもお付き合いしたことがあったと思いますが(今は亡き某S誌)、そこでもそうでした。A-S strikeのもしかり。来ないのなら、常設にしても意味がありません。有体に言って、ページのムダです。従って、ここでは「来たら載せる」という方式を取る事にしていたのです。ネットゲーム関連で買ってる人もそうですよ。待ってるだけじゃ何にもありませんからね。自分でどんどん情報提供して下さいよ。

……話が横に逸れたようで、ご提案のあったアンケートの件ですが、こないだやった分については公表しません。はっきり言ってデータにならなかったし。パソコンについては分母そのものが少ない中で98/88党が圧倒的多数。68とX1を全部ひっくるめて片手の指で余るんですよ。他にも、ネエ。

現在ここまで言われても、私は読者コーナー常設に対してノリ気ではありません。今の様子では多分小西さんの、うまく行って蔵田さんとだけの独占ページになるおそれが過分にありますし、そうなるとページの趣旨から外れます。逆に言い出しっぺが何もしない、という最悪の事態も考えられますし、どっちかと言やその確率の方が高いのでは?そうなればなつたで「編集の責任」なのかもしれません。

様子を見てると他のみなさんは別に必要としていないようですし、今回常設にしても前例に漏れず形骸化するだけであろう事が充分予想できます。それでも、なお、と言うのなら、ゴーストコーナーになりにくいような具体的な案を提示してみして下さいな。

そりゃまあね。今までこうやってエラそうにダラダラ書いたの後から見直してみりゃ、「手紙が来ないのが怖い」て一言に尽きるわけですが……。とりあえず、こつから先は私信を勝手に載せます。ご免なさい。

☆(真鶴の)影山って、そんなに嫌われているほど悪いことをしていないと思うが……(笑)。少なくとも、女子には手を上げていないぞ。それにいじめているのは勝だけだし……。う〜ん、なぜ、菅原さんが手を出してきたんだろうか……。今度、本人に聞いてみようかな?沖田もどちらかというと影山より風紀委員の方に手をあげるべきだと思うが……逆うらみもいいところだ。そういう輩には制裁でも加えたらか(笑)。

(神奈川県・蔵田昌弘)

㊦:言われてみればその通り。彼の一派は女子には手をだしていませんが、表立って抵抗しているのは女子ばかり。現実もそんなものかも知れないけど、確かに「ハテ」と思わせるものはある。

☆「Damyan=Kizaki's～」ははじめ何かと思いましたが、何かのゲームなわけですね？

学校の授業でもサバクの話がありました。「飛行機事故でサバクに不時着して、次にあげる15個の品物のうちに必要な順にあげなさい」みたいなグループワークの問題で。「これはゼツタイ必要なし!!」と思ってたものが実は一番必要だったと云う……。誤差が40以上だとちょっとマズイかな、と。うちのグループは43。うーん、死んだね。でもけっこー難しかったですよー。40以下のグループの方が少なかったもんなあ。でもこーゆー授業はおもレーので好き。  
(北海道・渡部里奈)

㊤：「Damyan～」は、「(有)遊演体」という会社がやってる商業PBMを枕にした話です。その会誌にBlowの広告を載せてもらってる(形振構わず……)以上、一応載せるものは載せないといけませんし。

不時着で要るものと云えば、二昔ぐらい前までは、北極まわりの航空便では対シロクマ(食料にするためにも)用にライフル銃を載せていたそうです。いまでは救助態勢が完備した事もあって無くなったようですが……。何にしても必ず要るのは、水と無線機ですね。



### ア ン ケ ー ト

コピーして、購入申込み時に送って下さい。住所録作成に使うので、住所だけは必ず書いて下さい。

① 1992年1月1日午前0時ちょうど、あなたは何をしていましたか？

② 去年12月29/30日の「コミケ41」には行きましたか？

29日だけ行った/30日だけ行った/両方行った/行くか、そんなもん

③ 売り手ですか、買い手ですか？

売り手(サークル名: \_\_\_\_\_) / 買い手 / だから行ってねーって

④ 「鈴木商店(のちエテルナ)」の「パノラマアワー」を買ったことはありますか？

⑤ 何でもアリです。あなたが一番好きな機械を1つどうぞ。商標でも結構です。

⑥ あなたの持ち物の中で、一番古いものは何ですか。

\_\_\_\_\_年前の

⑦ 初詣、一番最初に行ったのはどこですか。

住所 〒 \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_ ( \_\_\_\_\_ )

～ 一 等 喫 煙 室 ～

菊地：ああ、久しぶりだなあ。

宇垣：ホントにね。

岬：前のが出たのが12月の頭だから、2ヵ月ぶりか。随分延びたな。

香津美：休み癖が付いたんでしょ？

菊：……うーん、耳が痛い。確かにね。でも鬱状態になってるのも効いてるかな。

宇：また鬱のせいにする。まあそりゃ、胃痛のせいになんか進歩だけど。

菊：胃痛をなめんなよ（註1）。何たって、何がどうなっても胃腸のどの辺が荒れてるか、ハッキリわかるんだから。こう……何一つか、シクシクキリキリしてきてだな、……

岬：わーったわーった。もう聞き飽きた、その話は。

菊：……それはそれとしてだ。なあカッチちゃんよ、船P（註2）はどうなった。

香：どき。えーとね。そのね。

菊：……まだできとらんのか。

香：手っ取りばやく言えばそういうこと。

岬：遠回しでもそうだろう？

菊：とりやらずどういう構想なんか言ってみね。どうせこの辺を特コに載せるから、何かアイデアがもらえるかもしれない。

香：うーんと……まず、舞台は大西洋と太平洋。時代は定期船黄金期（註3）ね。プレイヤーは船会社のオーナーになるのよ。でもって配船状況で集客量を競うの。そこまでは決まってるんだけど、ここまですら結構問題があんのよね。

菊：言ってみ。

香：まず、当時の世相知らないと、全然つままないのよ。

宇：そりゃそーだわ。でもそれって、どんなのでもそうじゃない。

香：うん、あと結果発表の形式ね。新聞形式にしてもいいんだけど、わたし作文ヘタだし。AS方式を使ってもいいんだけど、それだと単純すぎてゲロゲロにつまんないし。

菊：だそうです。皆さんアイデアちょうだい。

岬：誰に言ってるんだ。

菊：もち、読者だ。特にPBMマスター経験者。

宇：見上げた根性。

菊：ほめ言葉と受け取ろう。……文章形式にするならするで、俺が書いたっていいけどな。

香：ホント!?助かる！

菊：で、最低限どんなデータが出る。

香：まず、その会社がどういう航路にどういう船をどれだけ配置したか。これは絶対ね。あと、その会社が客を集めるためにどんなサービスを提供したか。これで集客力が決まるの。ネットゲームのフリーアクションと同じだと思う。

岬：真鶴とも一緒だ。

香：……まあね。最初に持つてる船と資金はこっちで決めるの。それで新造船造ったり、船や航路を売り買いしたり。だから、キュナードで大西洋に集中した人は有利かもね。

岬：ムチャ有利すぎらあ。対策は？

香：んとね、キュナードとホワイト&スターを分割しとくつもり。史実だとこれじゃホワイトが潰れるけど。あと、新造船はやたらに造れないようにするはず。

菊：キュナードとホワイト、これが確定、と。あとは？

香：郵船とダラー、あとフレンチ・ラインでしょ。P&Oとか大阪商船もいいな。

岬：この船オタク！

香：あんたにオタク呼ばわりされる筋はないわよ！

菊：ええい！やめんか。その話になるとキリがない。

岬：キレがいいからキリがない。香りがいいから……

菊：やー、めー、んー、かー！

宇：すっかりまとめ役が板についちゃったねえ。

菊：あたり前田のクラッカー、オレはこれでも一応会長だ。  
宇：昔はセーちゃん（註4）の役まわりだったのにね。  
岬：そう、あの大阪支部長。  
香：元気でやってんのかね。  
菊：こないだA Sの側面図また送ってきたぞ。とりあえず元気らしい。……まったく、暮れにちょっと帰って来ただけでまたトンボ帰りしやがって。  
香：なーにがいいのかしらん。  
岬：案外女ができたりしてて。（註5）  
宇：うーん、ありうる。って？ないないない。  
菊：だよなあ。あいつ固いから。  
香：何か不安になってきた。  
岬：いっぺん奴のアパート行ってみたら？行ってみてさ、こう、下の電柱の影から覗いてみたら、結構シャンな女が奴の横で、「はいアーン」とかやっててさ。  
菊：いくら何でもそれはないだろ。「はいアーン」なんて、今時はやらん。  
岬：じゃさ、すげえシワシワの婆さんなんかいたりして。（爆笑）  
宇：セーちゃんならやりかねないね、それ。  
香：からかって楽しい？  
菊：まあまあ。男は正宗だけじゃないんだから。強く生きなきゃダメだって。  
香：徹夜したでしょ。テンション変よ、提督さん。  
菊：ったりめーだア！必修でありながら7割落ちるつつう悪評高い民法のテストがあったんだから。  
宇：いつの話だっけ、それ。  
菊：おととい。まだ引きずってんだよなあ。  
岬：あーあ、試験期間中にこんな事やってる俺達って一体……（註6）  
宇：要はオタクだってこと。  
菊：そう。どいつもこいつもみんなオタクだあ！

（ 一 同 嘆 息 ）

香：ねえ、今気が付いた。シワになってる。  
菊：……、のあにい!?  
宇：あぁー……ほんとだあ。  
岬：やり直すかい。  
菊：せ、千円分……胃が……（コピー機に崩れる）  
宇：……大勢に影響なし！印字は切れてないし、何とかしよ。  
菊：ぐぐ……金があればやり直すんだが……（まだ立ち直れない）  
宇：折る段階で伸ばそうよ。何とかなるって♡  
岬：とりあえず天下（註7）行こう。食いながら考えよーや。  
香：厄日ね。（註8）

註1：「仏教徒を～」の後遺症。蔵田さん、何とかして（苦笑）。

註2：香津美が計画中の民間船舶ものPBM。

註3：とりあえずここでは1930年代後半。

註4：長船のこと。本名正宗征士、剣道初段（?）。

註5：どうなんだ、正宗。

註6：これを録ったのは、第1刷の前半分のコピー中である。

註7：「天下第一」の略。空技廠御用達のラーメン屋。とんこつラーメンがもの凄く美味しい店。しかも安い。国道248号沿い、「三宿」バス停のまん前。

註8：ボソッと言うから怖い。



後記

菊：おお、凄いだ。何てスッキリしてるんだ。  
 宇：祝、会長回復（とりあえず）！気をつけてよね。あんたが倒れると空技はマヒ状態になるんだから。  
 岬：皆さんに一言言つときますが、会長はまだムリしてます。わかったね？  
 長：菊地が随分やつれておった。何があった？  
 香：永平寺氏が永平寺まで徒歩の旅に出ました。東海道・北陸道沿線の方、よろしく。  
 D：那由他にハマリなさい、Xにハマリなさい、金欠地獄にハマリなさい、これでキミも俺たちの仲間さ〜♪

Staff

編集長：菊地研一郎／編集補佐：宇垣麻美  
 香津美どぶろく／筆者：本居こじ  
 Damyan=Kizaki 岬当麻 絵：ただのりな  
 (脱稿順)

Blowers 第5号  
 第3巻第1号(通巻6号)  
 平成4年1月25日発行 代価300円  
 (送料別)

祝・3度目の正月!!

やー。めでたい。

編集人 菊地研一郎  
 発行人 菊地研一郎  
 発行所・印刷所 「空技廠」

※本誌記事の一部または全ての無断使用を禁じます。

今月の表紙

「冬」……でいいでしょうか、師匠?

画：ただのりな

今月の裏表紙

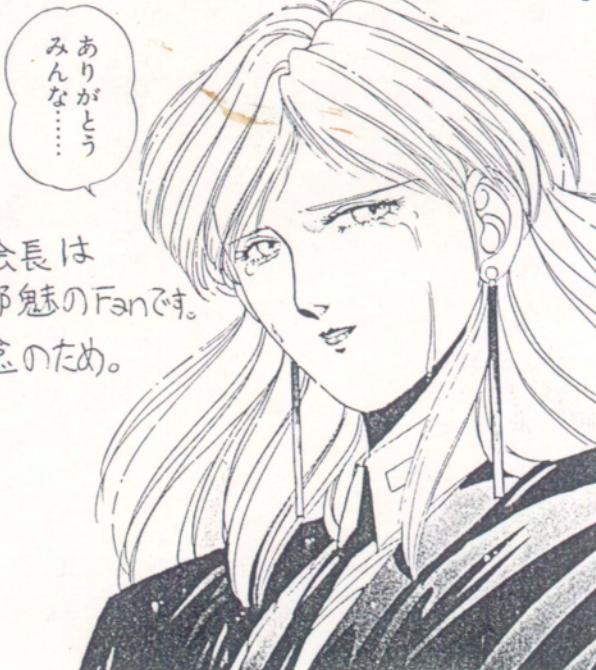
「ラリー課長、会長代行になるの巻」

チョンボ：岬当麻

次回「祝・麻美姐 限定解除」記念号は、

2月末日発行予定です。

……しかし、そう簡単にパスできる試験なのか?



ファンの人、怒らないでね。

TTTT